

西大寺本金光明最勝王經平安初期点における希望表現について

柴田 昭二
連 仲友

目次

- 一、はじめに
- 二、原漢文における漢字形式
- 三、各漢字形式の訓法
- 四、おわりに

一、はじめに

本稿は、別稿^①を受け、西大寺本金光明最勝王經平安初期点における希望表現^②を説明しようとするものである。

金光明最勝王經十卷三十一品は、唐の長安三年（七〇三）義浄の訳であり、義浄の訳した十数年後に日本に伝来されたと説かれている^③。また、西大寺本の書写は天平寶字六年（七六二）であり、訓点^④は平安初期に加えられた白点と、永長二年（一〇九七）に施された朱点とがあるが、ここで研究対象としているのはその白点である。

漢文の訓読は奈良時代にはすでに始まっていたと考えられるが、それが記入された形で現在に伝わっている文献は、平安時代に入ってから

もので、それがいわゆる訓点資料である。その中でも西大寺本金光明最勝王經平安初期点^⑤は資料的価値が高く、それにおける希望表現の解明は訓点語全体の希望表現の解明に有意義だと思ふ。

テキストには、春日政治博士「西大寺本金光明最勝王經古點の國語學的研究・本文篇」（勉誠社 昭和四十四年）を用い、用例の訓読もそれに従うことにする。

二、原漢文における漢字形式

言うまでもなく、漢文は中国語を表現した文であり、それを表記するに漢字が用いられている。一方、訓読とはその漢文を日本語に訓み下すことであつて、その訓み下されたものは日本語の文となる。従つて、訓点資料からは実に中国語と日本語と両方の文体及び用語を見ることができ、希望表現に関して言えば、原漢文に如何なる漢字によつて表現されているか、また、日本語の訓読文に如何なる表現で対応しているか、を考えるのが必要な手順であろう。訓読についての考察は次節に譲るが、ここでまず原漢文における希望表現の構成を見ることにする。

西大寺本金光明最勝王経においては、明らかに希望表現を表す漢字形式に、「欲」約一〇〇例、「願」約一八〇例が認められる。その他、「希」「楽」「請」「求」なども見られるが、意味的にも量的にも周辺的な存在である。これからの考察は「欲」「願」についてのみ行い、周辺のものを省略する。

次に、古代中国語における「欲」「願」の意味を見よう。それぞれの古辞書における解説は次の通りである。

欲—「説文」欲、貪欲也。从欠谷声。「注」欲、貪也。「詞詮」

外動詞 願也。時間副詞 将也。言未来之事用之。

願—「爾雅、訓詁」願、思也。「箋」願、念也。「方言、一」願、欲思也。「正字通」願、欲也、覬望也。「注」願、猶慕也。

即ち、「欲」の表す意味は「願也」「将也」である。「願也」とは希望表現であるが、「将也」とは「—しようとする」の意、いわゆる将然の意を表すものである。本来、将然の意を表す「欲」を考察から排除してもよいが、特に動作の主体が人間である場合は、時に、希望と将然とはつきり区別することが困難である。また、希望と将然の意味上の相違は「欲」の訓法にも影響を及ぼすため、将然の「欲」を考察から完全に排除できない場合も多い。

「願」の表す意味は「欲思也」「欲也」である。これらの解説からも見られるように、「願」の表す意味はすべて希望表現に属する。

右の古辞書の解説に、「欲、願也」「願、欲也」と互いに註釈語となっていて、如何にも両者はよく似ているように見えるが、実際、これは両者の基本的な意味のみを捉えたもので、希望を表す点において一致しても、両者の間にはニュアンスの差が読み取れる。即ち、「欲」の表す希望は「将然」に近く、積極的なものであり、「願」の表す希望は「欲」ほどの積極性がなく、より内心に止まるものである。

三、各漢字形式の訓法

これから、原漢文における「欲」「願」に対応する日本語の訓法を考察する。

(一) 「欲」の訓法

西大寺本金光明最勝王経平安初期点における「欲」に対応する訓法は次の通りである。(訓点資料の性質によってその訓法を一つに特定できない場合もある。ここで確実にその訓法を特定できる用例を確実例と称し、以下の考察にもできる限り確実例を用いる。)

オモフ	六四例(確実例二〇)
オモホス	三例(確実例一)
ホリス	一例(確実例一)
ス	一例(確実例七)
ネガフ	二例(確実例二)
ネガハクハ	一例(確実例二)
ネガハシ	一例(確実例一)
—ヨクス(複合動詞)	二例(確実例二)
ヨク(名詞)	二〇例(確実例二〇)

1、「オモフ」「オモホス」

「欲」の訓法は多様に亘るが、量的に見れば「オモフ」が最も多く、「欲」の訓法の主流はこの「オモフ」と言ってもよい。まず、「オモフ」の例を見よう。

(1) 是善男子善女人欲求清淨

是の善男子善女人は、清淨を求(め)むと欲ひ、(二八頁)

(2) 我欲救衆生

我レ衆生を救(は)むと欲(ひ)て、(一七五頁)

「オモフ」と訓む場合、その訓み添え語は何れも「ムト」である。即ち、「ムトオモフ」で漢字「欲」に対応して、現代語の「―したい」の意を表す。なお、「ムトオモフ」と訓む場合はすべて希望表現の下位分類の願望(3)に当たり、希求(3)及び將然を表す例がない。

次に、「オモホス」の例を見よう。

(3) 爾時世尊說此呪已爲欲利益菩薩摩羅薩人天大衆令得悟解甚深眞實

第一義故重明空性

爾時世尊、此の呪を説キ已(り)たまひ、菩薩摩羅薩人天大衆を利益して、甚深に眞實なる第一義を悟解すること得令(め)むと欲すが爲に、故に重(ね)て空性を明(し)たまふ。(八五頁)

右の例における「ムトオモホス」は、「ムトオモフ」と構文及び表す意味は同じであり、異なるのは待遇の差のみである。「オモホス」は「オモフ」の敬語形式で、世尊に対して敬意を表す表現形式である。

2、「ホリス」「ス」

(4) 佛告天帝釈善哉善哉善男子汝修行欲爲無量無邊衆生主令得清淨解脱安樂哀愍世間

脱安樂哀愍世間

佛、天帝釈に告(は)く、「善哉善哉、善男子汝も今修行し、

欲りすラク、無量無邊の衆生に、清淨解脱の安樂を得令(め)

むが爲にもして、世間を哀愍し、一切を福利(せ)むとなり。(四三頁)

例(4)における「ホリスラク」は、「ホリス」に「ラク」を加えたものである。この「ホリスラク」は、文頭に位置し、文末の推量の助動詞「ム」と呼応して、「ホリスラクム」の構文で用いられている。これは、後述する「ネガハクハム」と同様の構文であり、いわゆる陳述副詞的用法である。

右の例(4)を除けば、それ以外の「欲ス」と記される例は一体「ホリス」と訓むか、単なる「ス」と訓むかを決める手段がない。次の例を見よう。

(5) 是時大王爲欲遊觀縱賞山林

是の時に大王遊觀せむと欲すが爲めに、縦マに山林に賞シビたまひキ(山林に賞デマシシキ) (二八九頁)

右の例に見られるように、「欲」に「ス」の訓点が付けられているが、しかし、一体「ス」だけと訓むか、それとも「ホリス」の省記と見なすべきか、極端に言えば「オモホス」「オボス」の可能性も考えられるため、不明である。春日博士は未詳とされながら、意欲の場合は「ホリス」、將然の場合は単なる「ス」と訓むのではないかという考えを示されているが、問題は意欲か將然かを特定すること自身は難しいのである。

ここで注目したいのは構文の特徴である。構文の視点から見れば、このような例には例(5)のように、「時―欲」「欲―時」の構文が目立つ。このような構文に対して、願望より寧ろ將然の意をとる方が自然であろう。そうすると、やはり「ス」と訓むのが合理的である。

3、「ネガフ」「ネガハクハ」「ネガハシ」

(二)「願」の訓法

(6) 若有衆生爲欲供養是經王故

若有ル衆生の是の經王を供養(せ)むと欲フが爲の故に、

(一五三頁)

西大寺本金光明最勝王經平安初期点における「願」に対応する訓法は次の通りである。

例(6)の構文上の特徴といえは、「ムトネガフ」の形式である。

(7) 復欲令此最勝王經所在之處爲諸衆生廣宣流布

復は欲ハクは此の最勝王經をも所在の〔之〕處にして、諸の衆生の爲に廣宣し流布(せし)めて、速ク隱没(せ)ず〔不〕〔あら〕令めてむ。(二二〇頁)

グワンス	(副詞)	二二例
グワンス	(動詞)	二例
ネガフ	(副詞)	七七例
ネガフ	(動詞)	六例
―グワンス	(複合動詞)	一六例
グワン	(名詞)	五九例

「願」の訓法は、大きく字音読み「グワンス」と和訓読み「ネガフ」とに分けられ、「欲」の訓法ほど種類が多くない。

1、字音読み「グワンス」

例(7)における「ネガハクハ」は、先の「ホリスラク」と同様で陳述副詞的用法である。「ネガハクハ」は後世の資料に「願」に対応する訓としてよく見られるが、西大寺本金光明最勝王經平安初期点には「欲」に対応する訓として用いられている。

(8) 汝樂欲見彼往昔苦行菩薩本舍利不

〔汝等彼の往昔に苦行の菩薩たりしトキノ本の舍利をば見マク樂欲ハシヤ不ヤ。〕(一八七頁)

この例は「樂欲」という複合形式に対応する訓で、しかも「マク」と接続することにも注目したい。

字音読み「グワンス」は文中における位置によって、また、二つの類型に分けられる。一つは、文頭に位置して、文末の特定な形式と呼応するいわば陳述副詞的用法である。もう一つは、文末に位置する動詞的用法である。量的には、副詞的用法は二二例もあるが、動詞的用法は僅か二例である。

(9) 願常普濟於人天

願す常に普濟ク〔於〕人を天を濟はむ。(二〇二頁)

その他、「願欲す」「少欲」のような複合動詞と名詞については、何れも字音「ヨク」で読み、事情が単純であるため考察から省略する。

(10) 願説涅槃甘露法 能生一切功德聚

願す涅槃の甘露の法を説(き)て、能ク一切の功德の聚を生

(せ)む。 (二〇二頁)

これらの副詞的用法は二十余例見られるが、文末に「ム」と呼応するのが殆どである。

次に、動詞的用法の例を見よう。

(11) 四者於諸婆羅蜜多皆願修行成熟満足

四者〔於〕諸婆羅蜜多を、皆修行し成熟して満足せむと願する、

(六四頁)

(12) 二者常願解脱

二者常に解脱を願すとして、 (六三頁)

右の例(11)は、「ムトグワンス」の形で、例(12)は、「ムラゲワンス」の形である。

2、和訓読み「ネガフ」

先の字音読みの「グワンス」と同様、この和訓読みの「ネガフ」も副詞的用法と動詞的用法とに分けられる。量的には、副詞的用法は七七例もあるが、動詞的用法は僅か六例である。まず、副詞的用法を見よう。

(13) 願得速成無上尊

願フ速に無上尊と成ルこと得む。 (三八頁)

(14) 願王濟我命 知尼存與亡

願フ王我が命を濟(ひ)たまふとして、尼の存と〔與〕亡とを知

(らし)めたまへ。 (一九六頁)

右の例から見られるように、この副詞的用法は、字音読み「グワンス」の副詞的用法と同様、文末の特定の形式(「ム」「タマヘ」と呼応して、後世の資料によく見られる「ネガハクハム・タマヘ」に相当する。ここで注目したいのは、西大寺本金光明最勝王經平安初期点においては、「ネガハクハ」という訓が「願」の訓法に見られないが、「欲」に対応する訓として一例確認できた。類聚名義抄、色葉字類抄を見ると、「願」には「ネガフ」という訓が見られるが、「ネガハクハ」の訓は見られない。「ネガハクハ」の訓が与えられたのは、類聚名義抄には「甘」「聊」「惟」「祈」「欲」であり、色葉字類抄には見られない。次に、動詞的用法を見る。

(15) 若有願生富樂之家多饒財寶復欲發意修習大乘

若有ルヒトイ富樂の〔之〕家に生(れ)て、多ク財寶に饒ナラむと願ひ、復意を發(し)て大乘を修習(せ)むと欲(は)ば、

(四六頁)

(16) 願求三明六通声聞獨覺自在菩提

若三明六通ある声聞獨覺の自在の菩提の究竟地に至ルを願ひ求メ、

(四六頁)

右の例から見られるように、動詞「ネガフ」と読まれる際に「ムトネガフ」「ムラネガフ」という二形式が見られ、これも字音読みの「グワンス」と同じである。

その他の単純に字音で訓む複合動詞と名詞については、考察から省略する。

四、おわりに

以上、西大寺本金光明最勝王經平安初期点における希望表現について考察してきた。原漢文における漢字形式は「欲」「願」中心で、意味的には、「欲」は希望表現を表す以外に将然を表す用法もあり、「願」はすべて希望表現を表す。

「欲」の訓法には、「オモフ」「オモホス」「ホリス」「ス」「ネガフ」「ネガハクハ」「ネガハシ」、それに字音読み「ヨク」「ヨクス」の、計九種も見られるが、「オモフ」と「ス」が主流である。一方、「願」の訓法には、字音読み「グワンス」と和訓読み「ネガフ」のみが見られ、それぞれ副詞的用法と動詞的用法とが見られるが、副詞的用法が主流である。

【注】

(1) 柴田昭二、連仲友 「希望表現の通史的研究 序説」(『香川大学教育学部研究報告』第I部第109号 平成12年3月)。

(2) ここでいう希望表現とは、人の願い望みに関する、一種の心情的表現形式である。また、その下位分類として、話者自身の動作・状態に対して向けられるものを「願望表現」、他者の動作・状態に対して向けられるものを「希求表現」と称する。さらに、希望を直接発する場合を希望の「表出」、それ以外の問い質しや過去などの場合を希望の「説明」と称する。現代日本語においては、「願望」は「〜たい」の形で、「希求」は「〜てほしい」の形で表現するのが最も一般的である。したがって、一人称現在形式「一人称〜たい」「一人称〜てほしい」はそれぞれ「願望」、

「希求」の「表出」であり、一人称の過去「一人称〜たかった」「一人称〜てほしかった」、二人称の疑問「二人称〜たいか」「二人称〜てほしいか」、三人称の「三人称〜たがる」などの形式は、「説明」にあたる。

(3) 春日政治 『西大寺本金光明最勝王經古點の國語學的研究・研究篇』。

(4) 注(2)に同じ。

(5) 注(2)に同じ。

(6) 注(3)に同じ。

(しばたしろうじ 香川大学教育学部教授)
(れんちゅうゆう 香川大学外国人研究者)

(二〇〇三年七月二十五日受理)